

曹植と「国難」

——先秦漢魏文学における国家意識の一面——

福 山 泰 男

は じ め に

国家は、国土・民族・制度・文化・思想宗教等だけでなく、人々がそれに抱く目に見えない感情や観念によって形作られる。文学は古来、そのような国家に対する無形の意識や感情・観念を表象してきた。歴史の変遷と転換の中で国家というものの自明性や正当性が問われる時、詩人や作家はどのような情念や意識をそれに投影してきたのだろうか。

漢末魏初という王朝交代期の詩人、曹植（192～232）は、国家や皇家をめぐり、様々な、時に陰影のある意識・観念を表している。ここでは、古代・中世転換期の国家像と文学の関わりを、曹植のテキストから探してみたい。

—

曹植を見る前に、上述の視点で先秦から漢代にいたる文学を概観してみよう。

『詩経』にある「中国」の最古の用例はよく知られている。

民亦勞止 民亦た勞す
汔可小康 汔^{ほん}ど小康すべし
惠此中国 此の中国を恵し
以綏四方 以て四方を^{やす}綏んぜよ^{*1}

「民亦た勞す…此の中国を恵し…」というリフレインを4回繰り返す『詩経』大雅、民勞は、鄭箋に「時に賦歛重数し、繇役煩多たり、人民勞苦す（時賦歛重数、繇役煩多、人民勞苦）」^{*2}とあるように、人民をさいなむ悪政を批判した詩である。この「中国」とは京師とその周辺の地域を指し、都市国家に近い。「四方」とはその周辺国を言う。しかしこの詩は、そのような内と外の隔たりの強調よりも、為政者が「中国と四方を治めて民を苦痛と残虐から守るべきことを述べる」^{*3}ことに主意がある。

「中国」の用例は『詩経』大雅、桑柔にも見え、同様に亡国に導く政治の乱れを諷刺してい

*1 『毛詩正義』（『十三經注疏 整理本』北京大学出版社、2000）巻17、大雅、民勞、1338頁。

*2 同1337頁。

*3 加納喜光『詩経』（学習研究社、1983）下、411頁。

る。

...

哀恫中国	哀恫するは中国
具贅卒荒	具に贅 ^{ぜい} して卒 ^{ことごと} く荒る
靡有旅力	旅力有ること靡 ^な し
以念穹蒼	以て穹蒼を念う ^{*4}

上記『詩経』両篇における「中国」という語は、本来、為政者が善政を施すことによって民衆が安穩に暮らすべき場所にも関わらず、悪政に乱れる国として詠われている。

また「中国」だけでなく「国家」という語も見え、『礼記』緇衣に引かれる逸詩は、民衆のために善政が敷かれるべき領域として詠んでいる。

昔吾有先正	昔吾に先正有り
其言明且清	其言明にして且つ清し
国家以寧	国家以て寧んず
都邑以成	都邑以て成り
庶民以生	庶民以て生く ^{*5}

...

...

このように「中国」の最古の用例が、統治者ではなく民衆の視点・意識から国家の実像を伝えている点は興味深い^{*6}。

しかし、文学テキスト上の国家像は、このように批判・諷刺の対象として表象されるだけではない。『楚辞』九歌、国殤は、王逸が「国事に死する者を謂う、小爾雅に曰く、主無きの鬼を之を殤と謂う、と（謂死於国事者、小爾雅曰無主之鬼謂之殤）」^{*7}と注するように、戦役に身を捧げた死者とその靈魂を詠む。

首身離兮心不懲	首身離れて心懲りず
...	...
身既死兮神以靈	身は既に死し神以て靈し
子魂魄兮為鬼雄	子が魂魄は鬼雄為り ^{*8}

*4 『毛詩正義』巻18、大雅、桑柔、1391頁。

*5 『礼記注疏』（『十三經注疏 整理本』北京大学出版社、2000）巻55、緇衣、1767頁。

*6 岸本美緒『東アジアの中の中国史』（放送大学教育振興会、2003）第一章「中国とは何か」（13・14頁）は、『詩経』の「中国」の用例を紹介した上で、『孟子』梁惠王章句上に「莅中国而撫四夷也」、『春秋左伝』僖公二十五年に「德以柔中国、刑以威四夷」とある用例を引き、戦国時代以後、東西南北の夷狄との対比から、文化礼儀を共有する諸国を「中国」として意識するようになったと述べる。さらに、岸本は「注目しておきたいのは、『中国』とはもともと、国の名前ではなく、複数の国を含む緩い文明圏をさす語だった」と言う。中国における国家像は、もともと人間の意識・心性にもとづく文明という観念と分かちがたく結びついていることを再認識したい。

*7 『楚辞補注』（中文出版社、1979）巻2、九歌、国殤、140葉。

*8 同139葉。

「国殤」では、国事に殉死する者が国の英霊として称揚される。しかしこのような、我が身を捧げる対象として国家を見る意識は、後述するように曹植以前の文学ではむしろまれであった。

国家はもともと狭い領域で、本来人民が善政によって安楽に住むべき場所であるという批判意識と、その反対に身を捧げる対象と見る観念を『詩経』『楚辞』のそれぞれに見た。いずれにせよ、屈原が「俗人祭祀の礼、歌舞の楽（俗人祭祀之礼、歌舞之楽）」⁹をもとに『楚辞』九歌を制作したとされるように、両詩篇とも民衆の視点から「国」に言及していると言えよう。

逆に為政者の立場から、国家支配をめぐる感情・意識を述べる早い例として、漢の高祖「大風歌」が挙げられる。

大風起兮雲飛揚	大風起こりて雲飛揚す
威加海内兮掃故郷	威は海内に加わりて故郷に帰る
安得猛士兮守四方	安んぞ猛士を得て四方を守らん ¹⁰

小川環樹は、「大風歌」について、漢の武帝「秋風辞」と対比させつつ論じている¹¹。小川は「秋風辞」は、専制君主にとっても避けがたい老と死の苦悩を言う末部の二句「歓楽極まって哀情多し、少壮幾時ぞ老いを奈何せん（歓楽極兮哀情多、少壮幾時兮奈老何）」と、首句の「秋風起こって白雲飛ぶ（秋風起兮白雲飛）」¹²が照応し、「その不安の情を象徴する役目をはたしている」と述べ、「大風歌」も「大風起こりて雲飛揚す」という首句が「帝の抑えがたい不安を隠した心情を暗示」し、「皇帝の前途に対して抱く漠然たる不安の表現である」結句と対応していると説く。高祖「大風歌」の文学としての奥行きは、海内を征服したことを英雄的に詠むのみならず、国家の中心に位した統治者の「四方を守る」ことへの不安や困惑を述べるところにある¹³。

他方で、漢朝の草創期に漢王室の絶対性を讃える詩も見える。高祖の宮人・唐山夫人の作とされる「安世房中歌」は次のように詠っている。

王侯秉徳	王侯徳を乗り
其鄰翼翼	其の鄰は翼翼たり
顯明昭式	昭式を顯明す
清明鬯矣	清明鬯 <small>ちよう</small> たり
皇帝孝徳	皇帝の孝徳

*9 同 96 葉，王逸注。

*10 『史記』（中華書局，1959）巻 8，高祖本紀，389 頁。『漢書』（中華書局，1962）巻 1，高帝紀，74 頁。

*11 小川環樹「風と雲」（『小川環樹著作集』＜筑摩書房，1997＞第 1 巻所収）235～238 頁。初出は『東光』1947，第 2 号。

*12 胡本李善注『文選』（芸文印書館，1979）巻 45，18 葉左。

*13 吉川幸次郎「漢の高祖の大風歌について」（『吉川幸次郎全集』＜筑摩書房，1968＞第 6 巻）は「この歌の裏には、不安がある」とし、縷々論じている。

竟全大功 竟に大功を全うし

撫安四極 四極を撫安す^{*14}

この詩は、国家という中心とそれに征服されるべき「四極」とを対比させ、天の意を受けた漢王室の正統性を讃えている。前掲『詩経』のように批判・諷刺の角度から国家に言及する一方で、「安世房中歌」のようにそれを賛美することを通して、文学は国家像や国家のアイデンティティを形成することにもなった。さらに、そのような批判・賛美という両極のみならず、国家をめぐる文学表象には、前掲の高祖「大風歌」のように、支配者が抱く統治への不安や葛藤も見出すことができる。

漢による国家統一が様々な文学上の統一をもたらした点について、章培恒・駱玉明主編『中国文学史』は、次のように概観している。＜戦国時代の多元的地域文学は相互に影響・融合し、『楚辞』は漢賦に、楚歌は五言詩等に、戦国時代の散文は政論へと、漢代の様々な文学様式として吸収・統一されていった。漢朝は、地域による多元化から国家による一元化を文学にもたらした。＞^{*15}

しかし逆に言えば、そのような文学の一元化こそが漢代国家の文化的アイデンティティを形成したとも言えよう。

司馬相如は、「子虚賦」「上林賦」において漢武帝時代の繁栄ぶりと天子の絶対的地位を讃えている。司馬相如は「賦家の心は、宇宙を包括し、人物を総覧す（賦家之心，包括宇宙，総覧人物）」^{*16}と述べ、漢代国家の巨大な版図を称揚した。さらに司馬相如は、武帝への頌歌「封禪頌」において、天が下した瑞兆を例示し国家・国君の絶対性・神秘性を讃えている。

国家の威信は礼楽の整備によってももたらされる。「郊廟」等の典礼雅楽等、漢初に楽府の整備が行われたことは、国家の文化的統一や国家意識を高める上で大きく作用したであろう。

以上を要するに、漢初の文学は「安世房中歌」や司馬相如の賦・頌、あるいは楽府の整備を通して国家の権威を讃え高めた。その一方、逆に国家の支配者が抱える一個の人間としての不安や焦燥を詠う高祖、劉邦「大風歌」のような詩歌も見いだせる。先秦にその芽生えが見られた国家をめぐる意識・観念とその表象は、漢代帝国の成立にいたり様々な側面を示していると言えよう。

漢代帝国の興隆期は、文学テキストに国家賛美の表現が見られるが、漢朝の衰退に伴い文学における国家像も変貌を遂げる。衛広来によれば、政治的統一の代表として最高の国家主権を有し、かつ天命を受けた神聖なる皇帝権力（＝天立）は、後漢中後期に外戚に擁立されることにより世俗化（＝人立）した^{*17}。

*14『漢書』巻22，礼楽志，1047頁。

*15章培恒・駱玉明主編『中国文学史』（復旦大学出版社，1996）上巻，179頁。

*16『四部叢刊』電子版1.0版（万方数拠電子出版社，2001）初編，子部所収『西京雜記』巻2，頁表示無し。

*17衛広来『漢魏晉皇權嬗代』（書海出版社，2002）第1章「皇權士大夫与郡国 — 東漢分裂の三要素」89頁。

漢朝衰退期の政治的変容は様々な角度からの把握が可能であるが、さらに孫明君の論考を以下に要約し、後漢末士人の「天下」への志向に触れておきたい。＜そもそも『孟子』万章下に「天下之重」、滕文侯下に「天下之大道」と述べる聖人の道たる「天下」は、『荀子』正論に「天下は至大なり、聖人に非ざれば之を能く有する莫きなり（天下者至大也、非聖人莫之能有也）」、また『呂氏春秋』貴公に「天下は一人の天下に非ず、天下の天下なり（天下非一人之天下、天下之天下也）」とあるように、もとより国家を超越する存在であった。「凡党事…海内塗炭…諸所蔓衍、皆天下善士」（『後漢書』党錮伝）と称され、「天下を以て己の任と為す漢末の党人」は、漢朝衰亡の時に会し、「日びに漸く朝廷より疎み離れる」こととなった。「初め顓、曹操を見て嘆じて曰く、漢家將に亡びんとす。天下を安んずるは必ず此の人なり、と（初顓見曹操、歎曰、漢家將亡、安天下者必此人也）」（『三国志』魏書、武帝紀）とあるように、後漢末士人はすでに漢室に対する信望を失い、その滅亡を予感していた。＞^{*18}

孫明君は、このような国家を超えて天下の経営に向かう後漢末士人の行動・精神を背景に見た上で、建安文学の特徴を、「天下意識の流露」と捉える。さらに孫明君は、漢末の文学を、士人の朝廷に対する「覬望・支持・徘徊・疏離・対立・決裂」の一連の精神を再現したものと概括し、そこに「国家（漢室）から天下に到る心路歷程」を見ている^{*19}。

後漢時代、特に後期から末期の文学に表れる国家意識の諸相は、さらに具体的な検討を要する。しかし、以上のような孫明君の考察からも、国家を超越し新しい時代を創り出そうとする後漢後・末期文学の特質の一端が理解できよう^{*20}。

二

後漢末に制作されたテキストは、後代の編纂になる史書以上に当時の士人の心性や意識を直接知りうる資料であるが、その中に「漢季」という表現がある。

陳琳「武軍賦」は、次のように記す。

漢の季は世の辟からず、青龍大荒に紀む（漢季世之不辟、青龍紀乎大荒）。^{*21}

また「袁紹の為に予州に檄す（為袁紹檄予州）」では、このように述べている。

方に今漢室陵遲し、綱維弛み絶ゆ、聖朝に一介の輔無く、股肱に折衝の勢い無し（方今漢室陵遲、綱維弛絶、聖朝無一介之輔、股肱無折衝之勢）。^{*22}

*18孫明君『漢魏文学与政治』（商務印書館、2003）「從“国家”到“天下”——漢魏士大夫文学中的政治情感考察」。

*19羅宗強『玄学与魏晋士人心態』（天津教育出版社、2005）第1章「玄学産生前夕的士人心態」は、後漢末士人の政權との対立から生じる感情・批判が文学表象に表れたことを論じ、その一例として「古詩十九首」を挙げている。

*20注15前掲書は、東漢中後期の文学について、「国家意識の薄さと個人意識の強さ（国家意識の淡薄和個人意識的強化）」にその特質を見ている。上巻、264頁。

*21『芸文類聚』（中文出版社、1980）巻59、武部「戦伐」、1070頁。

*22『文選』巻44、9葉左。

陳琳は建安中に没しているから、両テキストは漢代のものであることが明らかである。他方蔡琰は「悲憤詩」の冒頭で、次のように詠んでいる。

漢季失權柄	漢の季は權柄を失し
董卓乱天常	董卓天常を乱す
志欲図篡弑	志は篡弑を図らんと欲し
先害諸賢良	先ず諸賢良を害す
逼迫遷旧邦	逼迫して旧邦に遷らしめ
擁主以自彊	主を擁して以て自ら彊む ^{*23}
...	...

「悲憤詩」について、「漢季」という言葉から漢魏禪讓後の制作と判断する説がある。しかし、漢末、陳琳の上記2例から見て、実質的に漢朝が崩壊しつつあった後漢末期に「漢季」と表現しても不自然ではない。「悲憤詩」の制作時期は蔡琰帰漢後の建安年間と見なしてよいであろう^{*24}。

後漢末における「漢家」＝「国家」の表象を考えると、この「漢季」という表現は注目に値する。「初め顯曹操を見て、歎じて曰く、漢家將に亡びんとす、天下を安んずるは必ず此の人なり、と（初顯見曹操、歎曰、漢家將亡、安天下者必此人也）」^{*25}と見なす後漢末士人の政治観・国家観は、文学テキストにおいても同様に表現されていたのである。何進の部下から袁紹幕下へ、さらに曹操の支配下へとその従属先を替えていった陳琳にとって、漢家という既存の国家はもはや帰属対象ではなかった^{*26}。

では蔡琰「悲憤詩」における漢家＝国家とはいかなる存在か。「悲憤詩」は冒頭で「漢季」と述べ、漢代国家の終末を現実的に認識する一方、別の部分で南匈奴と漢との文化的・言語的差異を詩的モチーフとし華夷の別を詠んでいる。そこに、国家をめぐる蔡琰の意識・心性を読み取ることも可能であろう。しかし、「漢季」という言葉からも窺えるように、「悲憤詩」の主旨は華夷の対立と国家意識を強調することではない。

...	
見此崩五内	此を見て五内崩れ
恍惚生狂癡	恍惚として狂癡を生ず
号泣手撫摩	号泣して手を撫摩し
当発復回疑	発するに当たりて復た回疑す

*23『後漢書』（中華書局、1965）巻84、列女伝、董祀妻伝、2800～2803頁。

*24拙稿『「悲憤詩」小考 — 研究史とその問題点 —』（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』創刊号、2005）で、「悲憤詩」制作時期の検証を試みた。

*25『後漢書』巻67、党錮列伝、2218頁。

*26陳琳作とされる「飲馬長城窟行」（『玉台新詠』巻1、『樂府詩集』巻38）は、長城建築という国家事業を批判する。

...

我が子との生別の場面に端的に示されるように、「悲憤詩」でより浮き彫りにされるのは、蔡琰という一女性の、家族・個としての感情や苦痛、悲劇であろう。蔡琰にとっての国家とは、矛盾と混乱に満ちた世界であった²⁷。

陳琳・蔡琰のテキストから窺えるような現実感覚を備えた国家・政治への意識は、他の建安七子や曹操・曹丕にも見いだすことが出来る。王粲「七哀詩」第一首の冒頭はこのような詠んでいる。

西京乱無象	西京乱れて象 ^{かたち} 無く
豺虎方遘患	豺虎方に患 ^あ に遘う
復棄中国去	復た中国を棄てて去り
遠身適荆蛮	身を遠ざけて荆蛮に適く

... ...

路有飢婦人	路に飢えたる婦人有り
抱子棄草間	子を抱きて草間に棄つ
顧聞号泣声	顧みて号泣の声を聞き
揮涕独不還	涕を揮いて独り還らず ²⁸

... ...

この詩は、「棄」という言葉が2回用いられる。戦禍の「中国」を「棄て」荆州の地へ去る詩人と、我が子を「棄て」行く路傍の「飢えた婦人」。このように「七哀詩」は、詩人・婦人両様の視点から動乱による「中国」＝国家の中心領域の荒廃を描写している。王粲はこの詩を通し、もはや「棄て」去るべきものとして、後漢末の国家を深刻に批判しているのである。前章で、『詩経』における「中国」の語が、為政者の善政により民衆が安穩に暮らすべき領域でありながら、実際は悪政に乱れる国という含意を有することに触れた。『詩経』がもつ文学規範の強さを考えれば、王粲が「七哀詩」で「中国」という語を用いたのは、『詩経』を下敷きにしつつ、被支配者による批判・風刺の対象という意味をそこに含ませる意図があったのではないだろうか²⁹。

王粲は、建安13年(208)以後、荆州を離れ曹操に帰順した³⁰。王粲の「従軍詩」は曹操の武功を讃える内容を含むが、第一首では曹操を「相公関右を征す(相公征関右)」³¹と称しつ

*27拙稿『『悲憤詩』と『胡笳十八拍』－蔡琰テキストの変容－』（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第2号, 2005）参照。

*28『文選』巻23, 15葉左。

*29「中国」は「四夷」や「四方」と対比され、守るべき、しかし周辺から侵犯されやすい中心という意味でしばしば用いられる。「中国蒙被其難」（楊雄「長楊賦」<『文選』巻9, 4葉左>）「存撫天下，安集中国」（司馬相如「喻巴蜀檄」<『文選』巻44, 1葉左>）「四夷之与中国並也」（司馬相如「難蜀父老」<『文選』巻44, 23葉右>）等。

*30『三国志』（中華書局, 1959）巻21, 王粲伝, 598頁。

*31『文選』巻27, 10葉左。

つ、第四首では「一に我が聖君に由る（一由我聖君）」³²という美称を用いる。劉楨は、王粲が帰順する以前、曹操の下で荊州征伐に従軍していた往事を回想し、「贈五官中郎將詩」第一首で「昔我元后に従う（昔我從元后）」³³と詠んでいる。王粲・劉楨にとって、帰服すべき政治の中心はもとより漢家ではなく、「聖君」「元后」と賛美する曹操だった。

また、曹操自身、漢朝末期の建安15年（210）に布告した「十二月己亥令」で、「設使国家に孤の有ること無くば、当に幾人か帝と称し、幾人か王と称すべきかを知らず（設使国家無有孤，不知当幾人称帝幾人称王）」³⁴と述べる。この「令」において曹操は、自己の政治的責任感から、漢末の混乱の中、天下を平定するにいたったと論じている³⁵。曹操にとっての「国家」とは、「設使国家に孤の有ること無くば…」と述べるように、政治家としての責任倫理において新たに立て直すべきものとなっていた。

三

このような、曹操や建安詩人の新たな国家観と全く異なる国家意識・漢家意識を有していたのが曹植である。曹植は、建安20（215）年に曹操の征西に従軍した際、「贈丁儀王粲」において、「皇佐天恵を揚げ、四海兵を交うる無し（皇佐揚天恵，四海無交兵）」³⁶と詠んでいる。李善は「皇佐とは太祖なり（皇佐太祖也）」³⁷と注し、清の丁晏は「其父を称して皇佐と曰うは、大義凜然たり（称其父曰皇佐，大義凜然）」³⁸と論評している。元の劉履は、「皇佐」という呼称について、先に引いた王粲・劉楨の「聖君」「元后」という尊称と対比させ、「上は君臣の義を失わずと謂うべし（可謂上不失君臣之義）」³⁹と評している。「大義凜然」「君臣之義」と指摘されるように、漢朝の崩壊時期においても曹植にとって国家とは漢家であり、父曹操は漢の臣下であった。では、曹植はいかなる国家観を有していたのか。

曹植は、高祖より光武帝が優れている点を「漢二祖優劣論」で論じている。しかしその臣下については「將は則ち韓周に比し難く、謀臣は則ち良平に敵せず（將則難比於韓周，謀臣則不敵於良平）」⁴⁰と述べ、光武帝独りの天賦の才に比し、その群臣は主命に従うだけで、高祖の臣下より凡庸であったと評している。

この論に対し、諸葛亮は「曹子建光武を論ずらく、將は則ち韓周に比し難く、謀臣は則ち良平に敵せず、と。時人談ずる者は亦た以て然りと為す、吾以えらく此の言誠に大光武の徳を美

*32『文選』巻27，13葉右。

*33『文選』巻23，30葉右。

*34『三国志』巻1，魏書，武帝紀注引『魏武故事』，33頁。

*35拙稿「曹操『十二月己亥令』をめぐって——文学テキストとしての『令』——」（『六朝学会報』第四集，2003）参照。

*36『文選』巻24，4葉左。

*37同上。

*38丁晏『曹集詮評』（清，同治本）巻4，7葉右，眉批。

*39朱緒曾『曹集考異』（金陵叢書本）巻5，17葉右。

*40『曹集考異』巻10，2葉右。

みせんと欲すれども、一代の俊異を誣^しうる有り(曹子建論光武、將則難比於韓周、謀臣則不敵良平、時人談者亦以為然、吾以此言誠欲美大光武之德、而有誣一代之俊異)」⁴¹と述べ、逆に光武帝の優秀な群臣・武將を評価している。さらに、光武帝と心をつにした群英の存在があってこそ国家経営が成り立った、と主張する。諸葛亮は、政治が一人の天才の偉業ではなく君臣の異体同心による共同作業であることを、自らの行動に照らし現実として認識していた。したがって、曹植の中心論点が歴史人物の優劣比較とはいえ、後漢の創業を超越的な皇帝一人の專政によるものとする主張に、諸葛亮はあえて反論を加えたのであろう。

このように、諸葛亮に批判された曹植の歴史人物論からわずかに窺えるのは、国家・政治に対する現実感覚の欠如ではないだろうか。だとすれば、先に挙げた「贈丁儀王粲」が漢朝崩壊末期において曹操を「皇佐」と称するものも、同様に、そのよう現実感覚のずれなのだろうか。もう少し曹植のテキストを検討してみよう。

「丹霞蔽日行」は、殷周・秦漢の革命を述べ、最後に次のように漢王朝の傾覆を詠む。

...

雖有南面	南面有りと雖も
王道陵夷	王道陵夷す
炎光再幽	炎光再び幽 ^{かす} かに
忽滅無遺	忽として滅び遺す無し ^{*42}

清の朱乾はこの詩を、「蓋し漢の亡ぶるを悲しむなり(蓋悲漢之亡也)」⁴³と述べ、曹植が漢の滅亡を悲しみ、魏朝の遠からぬ滅亡を暗示したと解釈している。

次の「情詩」は、「遊子」と「処る者」の互いの思慕の情を詠う。制作時期は漢末建安と魏初黄初の両説がありいずれも確証がない。

...

...

眇眇客行士	眇眇たり客行の士
徭役不得歸	徭役して帰るを得ず
始出嚴霜結	始出でしとき嚴霜結び
今來白露晞	今來りて白露晞く
遊子嘆黍離	遊びし者は黍離を嘆き
処者歌式微	処る者は式微を歌う ^{*44}

...

...

*41『四庫全書』(上海古籍出版社, 1987) 第848冊, 子部, 雜家類, 雜学之属, 「金樓子」卷4, 立言篇9上, 852頁, 30葉右。

*42『芸文類聚』卷41, 樂部1, 論樂, 742頁。

*43朱乾『樂府正義』(『京都大学漢籍善本叢書』<同朋社, 1980>第8卷)二, 479頁。「炎光再幽, 蓋悲漢之亡也, 而魏祚之不永, 於言外見之」。

*44『文選』卷29, 17葉右。

「黍離」「式微」は、李善が注するようにそれぞれ『詩経』王風、黍離と『詩経』邶風、式微を下敷きにしている。「黍離」の語について、毛序は「黍離は、宗周を関^{いた}むなり、周の大夫行役して宗周に至り、故^{もと}の宗廟宮室を過るに、尽く禾黍と為る、周室の顛覆を関^{いた}み、彷徨し去るに忍びずして、是の詩を作るなり（黍離、関宗周也、周大夫行役至宗周、過故宗廟宮室、尽為禾黍、関周室之顛覆、彷徨不忍去、而作是詩也）」⁴⁵と述べ、周の衰亡を傷む詩と解釈している。

また古直はこの毛序を踏まえ、「情詩」について「時に軍役息まず、漢京焚燬す、故に黍離式微の歎有り（時軍役不息、漢京焚燬、故有黍離式微之歎）」⁴⁶と解釈する。毛序・古直注が示すように、「情詩」の「遊子は黍離を嘆ず」という句は、「黍離」を踏まえ戦役の続く国家の衰亡を嘆いた表現ととらえることができよう。

「式微」の詩は、毛序に「黎侯衛に寓し、其の臣以て帰るを勧むるなり（黎侯寓于衛、其臣勸以帰也）」⁴⁷と解かれる。一方、伊藤正文は「曹植が『歌式微』といったのは、この式微の詩が『胡ぞ帰らざる（胡不帰）』の三字を含むが故に、家で帰りを待つ者が歌う詩として適当なものである」⁴⁸と説く。伊藤正文の解釈のように、「情詩」の主旨は、従軍の旅から長く戻ることができない「遊子」と、家に「処る者」のあいだの思慕の情を詠うことにある。「情詩」の巧みさは、そのような男女の情愛に、国家＝漢家の衰亡、戦乱という時代状況に対する嘆きを重ねた点にある。

「情詩」で下敷きとされた『詩経』王風、黍離に関連して、曹植「応氏を送る（送応氏）」にも触れておきたい。董卓により焼き払われた洛陽の荒廃を詠う、漢末建安中の作である。

歩登北芒阪	歩みて北芒の阪に登り
遥望洛陽山	遥かに洛陽の山を望む
洛陽何寂寞	洛陽何ぞ寂寞たる
宮室尽焼焚	宮室尽く焼焚し
垣墻皆頓擗	垣墻皆な頓擗す
荆棘上参天	荆棘上りて天に参 ^{まじ} わる ⁴⁹

… …

丁晏は、孫月峰の評を引き「詩は漢室を傷むとは、此の言之を得たり、黍離麥秀之感、惻然として傷み懷う（詩傷漢室、此言得之、黍離麥秀之感、惻然傷懷）」⁵⁰と述べている。丁晏は、董卓による破壊の余燼が残る洛陽の荒廃を詠う「送応氏」に、漢朝の衰亡に対する曹植の悲痛

*45『毛詩正義』巻4、王風、黍離、297頁。

*46古直『曹子建詩箋』（『層冰堂五種』＜国立編訳館中華叢書編審委員会、1984＞所収）巻1、8葉右。古直は建安年間の作とする。

*47『毛詩正義』巻2、邶風、式微、297頁。

*48伊藤正文『曹植』（岩波書店、1958）52頁。

*49『文選』巻20、31葉左・32葉右。

*50『曹集詮評』巻4、2葉右・眉批。

を読み取っている。

朱緒曾は前掲の「情詩」について、「自ら其の情を詠む、思婦の為に作るに非ざるなり…黍離漢の亡ぶを悼み、式微は並びに己の帰らざるを傷むなり（自詠其情、非為思婦作也…黍離悼漢之亡、式微并傷己之不歸也）」⁵¹と評し、曹植の漢の滅亡への格別な思いが含意されていると見る。しかし「情詩」の主意は、先述したように、「遊子」と「処者」の情愛を描出することにある。「情詩」は、なおそれに戦乱と国家の滅亡への悲歎が重ねられていると言えよう。

丁晏・孫月峰・朱緒曾のように、曹植の詩から漢朝への特別な思いを捉える批評が目立つが、いずれも文学的解釈の領域に属し確証はない。ただ、そのような解釈が生じる背景に考えられるのは『三国志』魏書、蘇則伝に見える次のような曹植の行跡である。

初め、則及び臨菑侯植魏氏の漢に代わるを聞き、皆服を脱ぎ悲哭す、文帝植の此くの如きを聞く、而れども則は聞かざるなり（初、則及臨菑侯植聞魏氏代漢、皆脱服悲哭、文帝聞植如此、而不聞則也）⁵²。

丁晏・古直・朱緒曾等の批評には、曹植の文学表現のみならず、漢の滅亡に際して服喪、悲泣したというその行動が念頭にあったのであろう。このような曹植の注目すべき行為をどう理解するか。いわゆる兄弟確執論を含め曹植をめぐる後漢末の権力闘争の逸話は、『三国志』裴松之注以後の小説資料等から生じたものであり、正確な理解は難しい⁵³。

小論を要するならば「丹霞蔽日行」は、漢朝の傾覆を淡々と述べ、「送应氏」は洛陽の荒廃を詠っている。「情詩」は、分断された男女の情愛と国家の衰亡・戦乱への嘆きを両様に読みうる意味の二重性をもつ。いずれにせよ、曹植の漢家に対する格別の思いやその有無を論証するのは容易ではない。だが少なくともこれらの詩歌から、傾頹・衰亡する国家に対する一種の挽歌の響きを読み取ることは可能であろう。漢末から魏初の詩人における文学表象や言説において、戦乱への呪詛・批判は見られても、曹植のように国家の衰滅自体を主要な題材に詠み込むのは特異と言えよう。

さらに「贈丁儀王粲」と歴史人物論「漢二祖優劣論」を並べて窺えることは、後漢末の他の詩人に比し曹植の現実認識にある種のずれが見られることではないだろうか。漢魏交代という変革期における、そのようなリアリティーの欠如や、国家・政治に対する曹植の意識・観念をさらに検討する必要がある。

四

魏成立後の太和年間、曹植は「自ら試すを求むる表（求自試表）」を上表し、次のように述べている。

*51『曹集考異』巻5, 25葉左。ただし、朱緒曾はこの詩を魏朝成立後、黄初年間の作と見る。

*52『三国志』巻16, 魏書, 蘇則伝, 492頁。

*53注48前掲書, 9・10頁, 参照。

夫れ国を憂い家を忘れ、軀を捐てて難を濟くるは、忠臣の志なり。……史籍を覽る毎に、古の忠臣義士、一朝の命を出して、以て国家の難に徇じ、身は屠り裂かると雖も、而れども功名は景鍾に著われ、名績は竹帛に垂るを觀て、未だ嘗て心を拊して歎息せずんばあらざるなり（夫憂国忘家捐軀濟難忠臣之志也。……世毎覽史籍、觀古忠臣義士、出一朝之命、以徇国家之難、身雖屠裂、而功名著於景鍾、名績垂於竹帛、未嘗不拊心而歎息也）^{*54}。

『三国志』魏書、曹植伝の太和2年（228）の条に「植常に自ら利器を抱きて施す所無きを憤怨し、上疏して自ら試すを求めて曰く…（植常自憤怨、抱利器而無所施、上疏求自試曰…）」^{*55}として掲載される「求自試表」は、「古の忠臣義士」の「国家の難に徇じ」た行動に照らし、曹植個人の政治参加の志を訴える。

政治的抱負を述べる言説という点から言えば、「求自試表」と表裏の関係にある文学テキストは次に掲げる「雜詩」であろう。制作年代は不明だが、呉の征討を述べており魏の黄初年間以後とも推定しうる。

…	…	
遠遊欲何之	遠遊して何にか之かんと欲す	
呉国為我仇	呉国は我仇為り	
…	…	
閑居非吾志	閑居は吾志に非ず	
甘心赴国憂	心に甘んじて国憂に赴かん ^{*56}	
…	…	「雜詩」第五首
…	…	
烈士多悲心	烈士は悲心多く	
小人媮自間	小人は媮にして自から間なり	
国讎亮不塞	国讎 ^{まこと} 亮に塞き ^つ ず	
甘心思喪元	心に甘んじて元 ^{こうべ} を喪わんことを思う	
…	…	
絃急悲風発	絃急にして悲風発す	
聆我慷慨言	我が慷慨 ^き の言を聆け ^{*57}	「雜詩」第六首

上記は、「我仇」「国讎」に立ち向かう意気を「国憂に赴く」「元を喪わんことを思う」と述べ、高ぶる感情の表れを「慷慨の言」と表現した部分である。筆者は別稿^{*58}で、「求自試表」「雜詩」等に見える曹植の政治や国家に関わる意識・表現には、およそ次のような共通点があ

*54『三国志』巻19、魏書、曹植伝、566・567頁。

*55同曹植伝、565頁。

*56『文選』巻29、16葉左。

*57同、16葉左・17葉右。

*58拙稿「曹植「白馬篇」考―「游侠兒」の誕生―」（『山形大学人文学部研究年報』第4号、2007）

ることを述べた。曹植は建安16年(211)、曹操による馬超等の征討に従軍して以来軍役には就かず、生涯を通じて戦役体験を描く材料をほとんど持たなかった。また、『三国志』魏書及び注が記すように、実際に曹操政権や魏朝廷の中枢で国家経営に参画することもほとんどなかった。必然の帰結として、曹植は言説や虚構の文学世界で、体験や現実より観念や表象の上で国家・政治に関わる自らの意識を示したのであろう。

次に「白馬篇」を掲げてみたい。制作時期が確定できないが、前節で触れたように、曹植の国家意識や政治認識には、漢魏の年代の差を越えた一貫性があるように思う^{*59}。

白馬飾金羈	白馬金羈を飾り
連翩西北馳	連翩として西北に馳す
...	...
辺城多警急	辺城警急多く
胡虜数遷移	胡虜数しば遷移す
羽檄従北来	羽檄は北従り来たり
厲馬登高堤	馬を厲 ^{はげ} まして高堤に登る
長驅蹈匈奴	長驅して匈奴を蹈み
左顧凌鮮卑	左に顧みて鮮卑を凌ぐ
棄身鋒刃端	身を鋒刃の端に棄つれば
性命安可懷	性命安んぞ懷うべけん
父母且不顧	父母すら且つ顧みず
何言子与妻	何ぞ子と妻とを言わん
名編壯士籍	名を壯士の籍に編せらるれば
不得中顧私	中に私を顧みるを得ず
捐軀赴国難	軀を捐てて国難に赴けば
視死忽如帰	死を視ること忽として帰するが如し ^{*60}

「白馬篇」は「游侠児」の美的形象とその血気・勇壯を描く。筆者は別稿^{*61}で、「白馬篇」の「游侠児」が、『史記』『漢書』『後漢書』等に記載される游侠少年の歴史的動態を踏まえていることに触れた。正史によれば、秦末から漢三国時代を通じ、無数の「少年」たちが勢力集団に糾合・組織化され、あるいは自ら参入を志願した。「少年」は、時には豪侠勢力における強力な兵力・戦力ともなる。また、朝廷による征戦に徴発されることすらあった。遊侠の「少

*59趙幼文『曹植集校注』(人民文学出版社, 1984)は、曹叡時代に鮮卑・匈奴により国家の安全が脅威にさらされていた状況から、游侠少年の尽忠報国が詠われたとし、太和年間の作と推測する。確証に欠けるが、比較的妥当な推論と思われる。413頁。

*60『文選』巻27, 22葉右・左。

*61注58前掲書。

年」は「悪少年」とも記され、「父母の教命を承けざる者（不承父母教命者）」^{*62}であった。「白馬篇」の「父母すら且つ顧みず、何ぞ子と妻とを言わん」と詠む句は、集団組織のために家族すら顧みない遊侠「少年」の性格と密接に関連している。

このような「少年」の歴史的動態は、文学作品における遊侠少年の意味形成に強固な因襲として働くであろう。曹植の「白馬篇」はそのような因襲を踏まえつつ、「游侠児」をさらに、私的勢力ではなく国家に進んで身を殉じる者へと変容させている^{*63}。

「少年」はまた、『史記』『漢書』の記載だけでなく、同時代の曹仁・魯粛等が「少年」を糾合していたという『三国志』の史実に見られるように、曹植にとって身近な存在であった。「白馬篇」は、そのような実像・動態をもつ遊侠少年に、曹植が創意を加えた詩的典型と見ることができよう。そのような典型の上に、「求自試表」「雑詩」と同様の国家政治に対する曹植の意識や抱負が投影されていると考えられる。

「求自試表」「雑詩」では、「国を憂い家を忘れ、軀を捐てて難を濟く」「国家の難に殉ず」「我仇」「国憂」「国讎」「喪元」「慷慨」という語句が着目される。しかし、「求自試表」のような政治散文のみならず、「雑詩」にも見られるこのような直裁的な言葉は、文学表現として痩せている一面があろう。他方「白馬篇」は、「游侠児」という虚構の主体を設けることによって、「国難」に「軀を捐てる」という觀念に物語的なふくらみをもたらした楽府作品であると言えよう。

以上、政治的言説から仮構の文学表象まで、「国憂」「憂国」「捐軀」「視死」「国難」「国讎」「慷慨」等々曹植の国家・政治に関わる意識・感情を瞥見した。

小論ではさらに、そのような国家意識と、「白馬篇」の「游侠児」に見た「侠」および曹植に特徴的な「慷慨」との関係を考えてみたい。

五

「白馬篇」は「游侠児」の「国難に赴く」姿が描かれているが、遊侠に関して若干補足したい^{*64}。増淵龍夫は、『史記』游侠列伝に書かれる遊侠を、民間秩序の維持者として評価し、遊侠の倫理・行動が、後漢末にいたるまでなお、個人と個人を結ぶ規範として働いていた点に注目した^{*65}。また増淵は、曹操が若年より「任侠放蕩」^{*66}であり、それに従った魏将も豪侠の徒

*62『漢書』卷90、酷吏伝、尹賞伝「輕薄少年惡子」に係る顔師古注。3674頁。

*63多数の「少年」が国家の兵力としてかり出された史実があるが、それらは「悪少年」の徴発という面がつよい。李広利の外征に不品行の少年が徴集されたという記載は、「少年」の性格および動態を見る上で興味深い。豪侠に糾合される「少年」はまた「悪少年」とも記され、国家の戦役に徴発される者であった。史料は「拜李広利為貳師將軍、發属国六千騎、及郡国惡少年数万人、以往伐宛。…益發惡少年及辺騎」等。『史記』卷123、大宛列伝、3174・3176頁。

*64拙稿注58前掲書および「曹植の『少年』」（『山形大学紀要<人文科学編>』第16巻第2号、2007）で触れた。

*65増淵龍夫「漢代における民間秩序の構造と任侠の性格」（『中国古代の社会と国家』岩波書店、1996）79～89・114頁。初出『一橋論叢』26-5、1951、1959補。

*66『三国志』卷1、魏書、武帝紀、2頁。

であったこと、さらに劉備が「豪侠と交結するを好み、年少争いて之に附す（好交結豪侠、年少争附之）」^{*67}遊民であり、さらに呉の孫堅・孫権とそれに従う呉将も游侠の徒であったことを例示し、「三国分立の混乱の際に、かれらのもとに相結び相はなれる游侠のむれの活躍は、依然として跡（ママ）をたたない」と述べている。そして、三国の群雄の軍事的勢力を構成する様々な新しい要素を認めつつ、その「変貌発展の諸相の内面において常にそれに作用している一つの基調として、依然として変わらない任侠的習俗の根深い機能を、私たちは看過し得ない」と論じる。増淵が説くように、魏呉蜀の勢力集団に共通する紐帯として働いた「任侠的習俗の根深い機能」は、なお注意に値しよう。

魏の勢力集団に関して言えば、小論第二節で述べたように、曹操にとっての「国家」とは政治家としての責任倫理において新たに立て直すべき対象であった。曹操政権において、必ずしも既存の漢朝国家の延命は企図されていないのである。漢代にいたる游侠は、『韓非子』五蠹篇や『漢書』游侠列伝で、国家秩序を乱す者として非難されるように、国家権力にとり秩序破壊者として弾圧の対象ともなった。時に国家・社会の秩序を逸脱し、個人の自立に立脚する存在であった游侠にとって、既存の国家は単に臣伏随従する対象ではなかったとも言える。したがって、曹操の政治行動の底流に、増淵の言うように「任侠的習俗の根深い機能」を見ることは不可能ではないであろう。

「軀を捐てて国難に赴けば、死を視ること忽として帰するが如し」と詠む「白馬篇」に目を戻したい。曹植は、上記のような曹操等の後漢末の軍事勢力を構成する「任侠的習俗」を念頭に置きつつ、「白馬篇」において「游侠児」を描いたのであろう。しかし、曹操の貴種として生育した曹植自身は、游侠の徒としての経歴を有しない。したがって「白馬篇」が描く游侠の姿とその心情は文学的仮想である。そして、国家権力とは別の勢力集団を構成する人的結合関係の紐帯として働いていた本来の游侠が、「白馬篇」の「游侠児」では、国家の難局に死を賭して立ち向かう者へと変容している。

要するに、個人・集団を結ぶ任侠的な関係を経験しない曹植は、自らの游侠の理想を「游侠児」に託し、そこに国家への侠的な犠牲の精神を込めたと考えられる。言い換えれば、歴史的な游侠の本質とは異なり、「白馬篇」の游侠は、自分と国家・皇家との間に一種の任侠的關係を仮構した文学的表象であったと言えよう。「白馬篇」のような楽府作品は虚構の文学空間を作るが、曹植はそこに国家政治へ参画する自らの強い意志を投影させたのであろう。曹植の国家経営・政治参加への意志は、「游侠」に新たな文学的意味づけをすることによりその表現の場を得たのである。

このような、曹植の文学における国家への義侠的な犠牲の精神は、他方で「慷慨」という言葉によって表されている。

*67『三国志』巻32、蜀書、先主伝、872頁。

曹植は「薤露行」において、明君を補佐する経世の理想に一人高ぶる思いを「慷慨」と詠う。

… …
願得展功勤 願わくば功勤^のを展ぶるを得て
輸力於明君 力を明君^{いた}に輸さん
懷此王佐才 此の王佐の才を懷きて
慷慨⁶⁸ 独不群 慷慨して独り群せず⁶⁹
… …

先に引いた「雑詩」第六首は末句でも「慷慨」と述べている。

国讎亮不塞 国讎^{まこと}亮^つに塞きず
甘心思喪元 心に甘んじて元^{こうべ}を喪わんことを思う
… …

絃急悲風発 絃急にして悲風発す
聆我慷慨言 我が慷慨^きの言を聆け

国家の外敵に対し命を賭して立ち向かおうとする憂国の感情を「慷慨」と詠っているが、「求自試表」では、次のように述べる。

何ぞ況んや巍巍たる大魏多士の朝にして、慷慨して難に死するの臣無からんや
(何況巍巍大魏多士之朝、而無慷慨死難之臣乎)⁷⁰。

このように、曹植が用いる「慷慨」は、政治参加の志や国家への殉難の決意に高ぶる感情を表現している。先述した国家への游侠的な犠牲の精神をあわせ見ると、曹植の政治言説や文学テキストには、それ以前には見られない国家意識の急激な高まりとその表現が指摘できよう。ただし 確認すべきは、曹植に、従軍や戦争の体験を詠む詩自体が存在しないことだ。曹植は、「求自試表」「雑詩」第五・六首、また「白馬篇」「薤露行」等で、観念や想像において「国家之難」「国憂」「国讎」云々と述べている。しかし、曹植の国家国難に殉じようとする「慷慨」の情念は、表現活動において衝迫作用として働くことはあっても、実際の行動に結実することはなかったのである。

このような実体験を欠いた観念の上での国家・政治に対する意識やその文学表象は、曹植における以下のような、表現活動に伴う「慷慨」の使われ方を見てもわかる。すでに例示した「絃急悲風発、聆我慷慨言」(「雑詩」第六首)以外、「余少くして賦を好み、其の尚ぶ所や、雅に慷慨^{つね}を好む(余少而好賦、其所尚也、雅好慷慨)」(「文章序」)⁷¹。「躍魚を南沼に観、鳴

*68『芸文類聚』は愷に作る。『楽府詩集』巻27により改める。

*69『芸文類聚』巻41、楽部1、論楽、741頁。

*70『三国志』魏書、曹植伝、568頁。

*71『芸文類聚』巻55、雑文部1、集序、996頁。

鶴を北林に^き聆く、素筆を^と擲りて慷慨し、大雅の哀吟を揚ぐ(観躍魚於南沼、聆鳴鶴於北林、擲素筆而慷慨、揚大雅之哀吟) (「幽思賦」)⁷²。「秦箏何ぞ慷慨たる、斉瑟和して且つ柔らかなり(秦箏何慷慨、斉瑟和且柔)」 (「箏篴引」)⁷³。「帷を^{かか}拵げ更に^{ととの}帯を拵え、節を撫して素箏を弾ず、慷慨して余音有り、要妙として悲しく且つ清し」 (拵帷更拵帯、撫節彈素箏、慷慨有余音、要妙悲且清) (「棄婦詩」)⁷⁴。

以上の「慷慨」は、悲憤の言葉や若年時から制作した賦の好尚、文筆表現に伴う心の昂ぶり、あるいは心の昂ぶりをもたらす音楽の響きを表している点に注意を払いたい。曹植の「慷慨」は、その用例の上から、言説あるいは虚構の表現活動に衝迫をもたらす動因になっていることがわかる。李善は、「忼慨して悲心有り、文を興こせば自ずから篇を成す(忼慨有悲心、興文自成篇)」(曹植「贈徐幹」)の部分に「説文に曰く、忼慨とは壮士の志を心に得ざるなり、と(説文曰忼慨壯士不得志於心也)」⁷⁵と注しているが、政治上の不満や失意のみを曹植の「慷慨」に読み取るのは一面的に過ぎるのではないだろうか。

曹植における「慷慨」の精神は、現実や体験よりは理想と虚構を創出する表現活動へと突き動かす動因の一つであったと言えよう。その表現世界の結晶を「白馬篇」における「游侠兒」の美的形象に見ることができるのである。

以上に見てきたように、曹植の国家あるいは皇家に関する意識・観念は、游侠少年の血気や、報国のために死を賭ける犠牲の精神によって特徴付けられる。曹植の「慷慨」は、そのような主情的な国家観とその美的表象もたらす動因として働いていると言えよう。

さらに言えば、「胡虜」「匈奴」「鮮卑」(「白馬篇」)、「呉国は我が仇為り」(「雜詩」第五首)「国讎」(「雜詩」第六首)という“敵”の表象も、曹植のテキストに顕著である。排外意識と国家意識は表裏一体であるが、前漢を経て後漢末、曹植に至り文学は“敵”を見だし国家を賛美するべく作用したと言えよう。

国家を犠牲の対象と捉える曹植の言説・表象は、前述したように国事に殉死する者を国の英霊として称える『楚辞』九歌、国殤にその遠い淵源を見ることができる。しかし、以上のような曹植の国家意識とその表象は、小論第一節で述べたように、曹植以前には顕著ではなかった。前述したように、頌歌的な賦や楽府も国家の絶対性・神秘化を称揚しているが、士人個人の国家に対する意識や感情は十分に表現されていなかったのである。

結 び

第一章で述べたように、国家というものに関わる観念・意識を表象する文学の発展と、国家

*72同、巻26、人部10、言志、470頁。

*73『文選』巻27、20葉左。

*74『玉台新詠箋注』(中華書局、1985)巻2、67頁。

*75『文選』巻24、2葉左。

およびそのアイデンティティの形成とは相即不離の関係にある。漢末魏初は、漢代国家が解体し国家像が変容していく転換期にあたる。国家に対する意識は、社会制度の変革のみならず文学や言説によって形成あるいは模索された。小論は、曹植を通してその一端を垣間見たが、そのテキストは慷慨・愛国・犠牲あるいは游侠少年等、主情的なモチーフによって創り上げられる国家像であった。

このような曹植の国家意識、特に国家に対する「犠牲」の情念は、じつは近代国民国家の形成と文学の関係に照らし見る時、興味深い共通点をもつ。

高橋哲也は、近代国家の戦争と「犠牲」の関係から国家論を展開し、ジョージ・モッセの次のような発言を引いている。「記念されたのは、戦争の恐怖ではなく栄光であり、悲劇ではなく意義である。……国民のイメージと変わらぬ魅力を重視する者が神話を創作する役割を果たし、戦死から痛みを取り除いて、恐怖と犠牲の意義を強調した。戦死者の祝典や、戦争から生まれた文学作品が、彼らを支援した」⁷⁶。また、高橋は国家における「犠牲」の論理について、「国民」を定義するエルネスト・ルナンの次のような主張を引いている。「国民とは、…人々が過去においてなし、今後もおこなす用意のある犠牲の感情によって構成された大いなる連帯心なのです」⁷⁷。

加うるに、曹植の描く国家や戦役に身を賭する游侠少年から容易に連想されるのは、若者が政治や国家に糾合され犠牲となってきた数々の歴史事実ではないだろうか⁷⁸。

文学はしばしば時代を越えて典型を創り出す。曹植の国家意識を示した「白馬篇」等のテキストは、古代と近代とを問わず、国家像のある一つの典型を描き出していると言えよう。国家は、時代の差無く意識の中の存在でもあるのだ⁷⁹。そのような国家を形成する意識や観念に、表象をもたらした早い例が曹植の文学であろう。

上述したように、曹植は国家政治や戦役にほとんど参与せず、「游侠」の経験もない。曹植の情緒的な国家意識は、現実や経験とはかけ離れた所からもたらされたことに注意を払いたい。

曹丕と比較してみよう。曹丕は漢から帝位の禅譲を受ける際、一端は辞譲するという布令を出す⁸⁰が、その中に次の詩が詠まれている。

喪乱悠悠過紀	喪乱悠悠として紀を過ぎ
白骨縦横萬里	白骨は萬里に縦横たり
哀哀下民靡恃	哀哀たる下民は恃む靡し
吾将佐時整理	吾将に時を ^{たす} 佐けて整理め

*76高橋哲也『国家と犠牲』（日本放送出版協会、2005）144頁。

*77同、122頁。

*78白虎隊・ヒトラーユース・紅衛兵・テロリストの若者たち等々、その一部に過ぎまい。

*79国民の意識や観念・イメージと近代国民国家の形成との関係は、B・アンダーソン『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』（書籍工房早山、2007）等参照。

復子明辟致仕 ^{きみ}子に明辟を復して致仕せんとす^{*80}

漢朝への服従を述べる言葉は儀礼にとどまるが、万里まで累々と広がる白骨に象徴される後漢末の戦乱描写が注目される。王朝の創業は白骨累々たる戦争の現実を背景にもつ、という冷めた認識が曹丕にあった。曹植が国家への犠牲を美化し文学描写するのと対照的である。

では、曹植の政治や国家経営に関する発言や文学表象は、すべて仮構の世界に閉じ込められたテキストに過ぎないのであろうか。曹植は、最晩年の太和二年「利器を抱いて施す所無」き「憤怨」を「求自試表」によって上訴した^{*81}。また同五年、曹植は士卒の息子が多く徴発されたことに対し、明帝曹叡に上表し、現状に鑑みて行き過ぎた徴発を諫め若者を返すよう建言した^{*82}。曹植のこの献策は、明帝の受け入れるところとなり、「皆遂に之を還す（皆遂還之）」^{*83}結果を得た。同六年、明帝は曹植はじめ諸王を参内させる。その際、曹植は、明帝と面会して治世を論議し国家経営へ参画することを期待したが、結局かなわなかった^{*84}。

「天下将に乱れんとし、命世の才に非ずんば済う能わざるなり（天下将乱，非命世之才不能済也）」^{*85}という後漢末の動乱期から国家の礎もまもらない魏初にかけ、新たな国家像が様々な言説や文学表象によって模索されている。

「白馬篇」の「国難」という語に約言されるような国家の解体と建設の時代において、曹植は文筆・言論の力で乱世に立ち向かったと言えよう。第三節で述べた曹植の詩歌における「傾頽・衰亡する国家に対する一種の挽歌の響き」は、第五節でふれたように、衰滅する「国家への義侠的な犠牲の精神」から発したものであろう。曹植の言論活動は、太和年間の行動に照らしても、中央政界から疎外されたことに対する代償行為ではない。国政へのあくなき参画の志と言論の力への信頼、そして「国難」への義侠心、それこそが曹植の文筆表現の原動力として働いていたと考えられる。

曹植のテキストが示すような国家意識とその表象は、その後の文学・言説においてどのように継承され、あるいは変容していくのか。稿を改めて論じたい。

*80建安25年(220)10月「漢帝以衆望在魏…奉璽綬禪位」(『三国志』巻2, 魏書, 文帝紀, 62頁)と記され、曹丕は禪譲を受けるが、それに対し、「王令曰…」(『三国志』巻2, 魏書, 文帝紀注引『献帝伝』所収, 65頁)と述べる中でこの詩を詠んでいる。

*81『三国志』巻19, 魏書, 曹植伝, 565～568頁。

*82同注引『魏略』, 574～576頁。

*83『三国志』巻19, 魏書, 曹植伝, 576頁。

*84同, 576頁。

*85『三国志』巻1, 魏書, 武帝紀, 2頁。

曹植与「国难」 ——先秦汉魏文学中的国家意识——

福 山 泰 男

所谓国家，不仅是由国土，民族，制度等因素构成，它还包括了人们对于它所怀有的感情和观念。而文学自古以来就起到了表达这种情感和观念的作用。关于表现所谓国家意识、情感以及观念的文学的发展和国家的形成之间的关系是密不可分的。

汉末魏初，正是汉朝瓦解国家面貌发生变革的时期。围绕着国家、皇族，曹植表达了许多具有那个时期的意识和观念。也是文学史上较早表现国家形成意识和观念的例子。

曹植的作品，通过慷慨、爱国、牺牲以及游侠少年等富有激情的主题，将国家形象呈现于读者面前。一些表现国家形象的文章如《白马篇》等是描写国家形象的典型之一。国家，是没有时代差异而存在于意识之中的。

那回荡在曹植诗歌中的对于颓废、衰亡国家的挽歌完全发源于投身衰亡国家的侠义的牺牲精神。即使参照太和年间的行为来看，曹植的言论也不是因为被权利核心排挤而产生的心里补偿，而是完全发源于对国家政治持之以恒的参与志向和对舆论力量的信赖以及对于国难的侠义之心，而这些正是激发曹植文学创作的原动力。